

実体験を基にした情報モラルの授業の有効性に関する一考察

藤木謙壮（備前市立日生西小学校）・今野貴之（明星大学）
中川一史（放送大学）・大本秀一（日本放送協会）

概要：本研究では、継続的にブログを使用し、より実態に近い状況で生じる問題を取り扱う授業設計を考察することを目的とした。公立小学校6年生1学級（16名）を対象に、平成29年6～7月にNHK for Schoolを用いた授業実践を行った。授業における児童の言動やワークシートの記述や感想、インタビューによる意識調査をデータとして分析した。その結果、児童が当事者意識を持って取り組んでいたことを確認することができた。今後の課題は、学校内でテキストチャットの特性に関する実体験を伴う授業実践を進めていくことである。

キーワード：情報活用能力、実体験、ブログ、当事者意識、NHK for School

1 はじめに

近年、スマホやタブレットなどの電子メディアの普及に伴い、特定の児童生徒に対する誹謗中傷が行われるなどの「ネット上のいじめ」という問題が生じている。この問題について文部科学省（2016）は、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、「パソコンや携帯電話等で誹謗中傷や嫌なことをされる」の項目では、全国の小・中・高・特別支援学校の合計をみると増加傾向にあることが確認されている。このネット上のいじめに対しては、学習指導要領の内容を踏まえ、各教科等の指導の中で、小学校低学年から発達段階に応じて情報モラルを取り扱っていく必要がある（文部科学省 2008）。

これまでの情報モラル教育は、注意喚起を促す知識伝達型の授業が多く、ネットを経験したことがない児童にとっては、実感を持つことが難しかった。情報モラル教育の変遷について石原（2011）は、行動にブレーキをかけることから前向きに情報活用をすることへの変化が必要であると情報活用の必要性指摘している。

岡山県教育庁義務教育課生徒指導推進室（2015）が行ったスマートフォン等の利用に関する実態調査では、コミュニケーションスキル

が十分身につけていないことが原因と考えられるトラブルが多いこと、メディアとの付き合い方で悩んでいる子どもが増えていることが報告された。このことから、情報モラル教育では、知識の伝達だけでなく、正しい行動を選択する力を育てる必要があることが分かる。

これまで行われてきた知識伝達型の情報モラル教育では、児童に対して一定の知識を習得することはできた。しかし、適切な情報モラル行動を知識として習得していたとしても、自身が実際に選択する行動には、不遵守行動を選択するといった知識と行動意図の不一致があることが指摘されている（田中ほか 2015）。知識習得を目的とする情報モラル教育では、実際に行動する際の不安や楽しさといった心情について、児童は実感を伴いながら学習することが難しかったと考えられる。

この実感を伴った学習については、長谷川ら（2011）がチャットを使った実践を行なっている。ここでは実体験として1時間という限られた授業の中でチャットを使用している。しかし、1時間の体験で、児童は実感を持つことができるものの、特別な授業として受け止められてしまう。ネットトラブルが多様化する現在の情報モラル教育では、継続的な実体験を経験させる

ことで生じるより児童の実態に近い問題を扱う必要があると考えた。

2 研究の目的

本研究では、継続的にブログを使用し、より実態に近い状況で生じる問題を取り扱う授業設計を考察することを目的とする。

3 研究の方法

3.1 調査対象

公立小学校6年生1学級(16名)を対象に、平成29年6月・7月、総合的な学習の時間「メディアとの上手な付き合い方を考えよう」の授業実践を行った。

3.2 単元計画

時数	学習内容
4	番組を視聴し、ネットトラブルについて学習する。
休み時間	ブログでコメントや写真を投稿する (2週間ほど投稿を続ける)
2	ブログに投稿されたものから、気づいたことをまとめたり、対応方法について考えたりする。

3.3 調査方法

上記授業を実施し、授業における児童の言動、ワークシートの記述や感想、インタビューによる意識調査などから、ブログを継続的に実体験することの効果について検討する。インタビュー調査では、特徴のあった児童に対して、単元後に実体験を基にした授業のメリット・デメリットに関する質問を筆者が行なった。

4 授業の実際

4.1 「スマホリアルストーリー」を使って知識を習得する

ネットトラブルの問題把握と対処法についての知識を習得するために、NHK for Schoolの「スマホリアルストーリー」を題材とした話し合い活動を行った。この番組では、課金・架空請求・コメント・なりすまし・写真投稿といったトラブルになりやすい問題について取り上げている。この番組は、全体を8～9つのシーンに分けている。このことは、児童の話し合いで問題のシーンを見直したり、最後のまとめのシーンだけ

を見せずにいたり、教師の授業計画に合わせて使うことができることにつながる。この番組を使用した学習を通して、児童がネットトラブルに対応するための知識を習得できたかどうかを、番組で扱われている内容をもとに作成したワークシートの記述をもとに、授業前後で比較した。多くの児童が、授業内の話し合い出された意見や番組の後半部分で提示される対処法などを記述することができた。このことから、児童はスマホを使用する上で生じる問題についての知識を習得するという授業の目的が達成できた。

4.2 習得した知識を使う

「スマホリアルストーリー」から習得した知識をもとに、児童自らがブログを使用する活動を行った。すると、「友達の写真を無断で投稿する」「コメントの返事がない」といった児童の姿が多く見られた。このことから、本学級の児童の課題を、写真の投稿の仕方・コメントの仕方の2つに設定することとした。

これらの課題に対し次のような学習を行った。写真投稿の仕方については、宿題として放課後に撮影した写真を基に話し合い、大切なことをまとめることとした。また、コメントの仕方については、実際にブログに書き込まれていたコメントをもとに作成したワークシートを作成し、それをを用いた話し合いから大切なことをまとめることとした。

4.2.1 写真投稿

宿題としてブログに投稿することを意識して撮影した写真の中から教師が選んだものを授業の中で扱い、投稿する際に気をつけることについて話し合った。写真は一度ネット上にあげると消すことはできないので、よく考えることが大切であるということは、「スマホリアルストーリー」で児童は知識として習得していた。そのため、撮影する際に、「友達や親の許可を取って写した」「背景に個人情報や写り込まないように気をつけた」という児童が多くおり、授業内で危険性があるものの例として扱われたことに関する写真は見られなかった。

しかし、写真の中には、撮影した場所が書かれたプリクラや電話番号が書かれた電信柱などの個人情報が入り込んだものがあった。これらはどれも授業の中で個人情報として扱われていないものであった。この危険性について話し合う中で「こんなところにも個人情報があるんだ。怖い」と改めて危険性に気づくことができた。この問題については、「プリクラを撮った場所が書かれている」「日付も危ないね」と、授業で習得した知識を基に判断することができていた。

4. 2. 2 コメント投稿

実際に児童が投稿したやり取りをもとにワークシートを作成し、これらの問題について、どう感じるか・どう対応するかについて話し合った。ここでは、友達の投稿にコメントをしたが、自分以外の友達には返事をしていないのに、自分だけ返事がないという内容を扱った。

この問題に対する児童の反応は、何も感じない・不安になる、の大きく2つの感じ方に分かれた。その後、時間の経過とともに感じ方がどのように変化していくのかについて話し合いが始まった。何も感じないという児童は、「(相手が)きつと何かあったのだろう」「他のことをして待っておけばいい」という落ち着いた気持ちでいるという共通点が見られた。不安になるという児童は、その後「イライラする」「より不安になる」という2通りに別れることが分かった。イライラするという児童は、初めは「(自分が)何か悪いことしたのかな」という不安な気持ちであったが、時間が経つにつれて「自分はコメントしてあげたのに、何で返事をしないのか」という苛立つ気持ちに変化し、コメントをどんどん送りたくなるという共通点が見られた。また、より不安になるという児童は、「(自分が)悪いことしたのかな」という不安な気持ちが増し、返事があつたかどうかを確認し続けないと落ち着かないという共通点が見られた。

このような受け止め方の違いを確認した上で、この問題に対してどのように対応すると良いかを考えると、返事があるまで放置する・返事がもらえるようにコメントを送り続けるという2つの対応方法に分かれた。

放置すると答えたグループでは「相手のことを考えるとしつこくなるのもよくない」という意見が多いのに対して、コメントを送り続けると答えたグループでは「自分が相手のことを意

識していることを伝える必要がある」という意見が多かった。このコメントを送り続けるグループの児童は、「語尾をカタカナにすることで柔らかく表現する」「～に絵文字をつけないとダメ」「謝るだけでなく、理由も必ずつける」などと、コメントをする際にもかなり細かいことにまで考えて送っていることが分かった。

5 結果と考察

本実践を通して、児童が当事者意識を持って取り組んでいたことを確認することができた。具体的には、学んだことを基に身の回りの危険性を考えたり、自分たちの課題を見出し、それに対する取り組みを提案したりした。

5. 1 ブログの投稿

継続的にブログを体験し続けたことで、より児童の実態にあった状況に近づけることができた。はじめの頃は、自分の気持ちを一方的に発信するものが多かったが、しばらく投稿を経験するうちに、相手を意識した投稿が見られるようになった。また、児童が投稿した写真の中には、授業で扱っていない個人情報が入り込んでいた。これらは、児童に習得してほしい知識を授業で扱っていた従来型の授業であれば、授業の中で扱うことができなかつた問題である。ネットトラブルが多様化している現在において、全てのトラブルを教師が想定することは難しい。実体験を基にした授業を行うことで、より子どもの実態にあった状況を、彼らが当事者意識を持って考えることができるといえる。

5. 2 児童の感想

児童はあらかじめ知っていたある程度の知識をもとに、実際に個人情報に気をつけながら写真を撮る中で、自分の身の回りのどういったところがその個人情報に当たるのかについて考えることができていた。一人一人の環境が違う中でこうした実体験をすることで、より当事者意識を持って体験的に理解を深めることができた。

児童の感想でも、「写真を撮るのに時間がかかったが、改めて個人情報が多いことに気づけた」というように、投稿するための写真を撮るといふ行動を通して、個人情報が身の回りにたくさ

んあることに実感を持って気づくことができたことが分かる。中には、「自分たちの身近な場所なので、「こんなところで気をつければいいんだ」という気持ちが増した」という記述も見られた。この児童はその後「投稿せずに、直接見せればいいんだ」と、違う方法を考えることができていた。このように、実体験を通して感じた大変さに気づくことで、情報活用能力の一つである受け手の状況などを踏まえた発信・伝達ができるようになることを考える。そして、一つ一つのネットトラブルを解決するたびに、経験したことを想起しながら考えていた児童の姿からも、身につけた情報活用能力がネットトラブルに直面した際の行動に影響を与えていたと考える。

5. 3 インタビューによる意識調査

児童へのインタビュー調査では、「自分たちのことだと意識が高まった」「危険性を感じることができた」などの発言や、「このままではトラブルにあいそうで不安。コメント力を鍛えるために何かしたい」という提案などからも、本実践に対する意欲の高まりが感じられた。しかし、「自分たちのことだから、色々言われると傷ついてしまう」という感想もあったことから、問題を取り扱う際の児童への配慮をより意識する必要あることが分かった。

6 まとめ

本研究では、ネットトラブルに対する知識習得を行なった後、ブログを使用した現実場面に近い状況で生じる問題を取り上げた授業の有効性を考察することを目的とした。NHK for Schoolを使用することで、ネットトラブルの特徴や対応方法に関する知識を習得することができた。その後、ブログ上の失敗体験を授業で扱うことで、問題点や改善点を学習することができるので、今後経験するであろう失敗を安全に体験・学習することができた。このことは、同じような不安を持つ友達と時間をかけて考えることができ、相手の反応を確かめながら対応方法を学習することにつながった。こうした、より児童の実態に近い実体験を経験したことで、自分た

ちの課題を意識し、今後に必要な取り組みを考えるなど意欲的に学習することができた。

7 今後の課題

今回はブログ使用して写真やコメントの投稿に関する実体験を行なった。このことで一定の知識や対応方法について考えることができたものの、多くの児童はテキストチャットアプリを使用しており、ネットトラブルもそれが原因となることも多く報告されている。テキストチャットの持つ特性である、会話のスピード・話題の並列性・テキスト以外の表現の使い分け(西川ら2015)が児童の判断力にもたらす影響は大きい。これらの特性に関する実体験を、学校内で、どのように行うのかについて考えていきたい。

参考文献

- (1) 文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説編
- (2) 文部科学省(2016) 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/1378692.htm (参照日 2017. 08. 20)
- (3) 岡山県教育庁義務教育課生徒指導推進室(2015) 「スマートフォン等の利用に関する実態調査」
http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/100840_2621251_misc.pdf (参照日 2017. 08. 20)
- (4) 長谷川春生・久保田善彦・中里真一(2011) 「情報モラル指導におけるネットコミュニケーション体験の効果」, 日本教育工学会論文誌 34(4), p407-416
- (5) 石原一彦(2011) 「情報モラル教育の変遷と情報モラル教材」. 岐阜聖徳学園大学紀要. 教育学部編 50, p101-116
- (6) 田中考治・園田未来・池田満・堀雅洋「情報モラル行動における知識と行動の不一致に関する心理実験的検討」, 日本教育工学会論文誌 40(3), p153-164
- (7) 西川勇佑・中村雅子(2015) 「LINE コミュニケーションの特性の分析」, 東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル(16), p49